

## ～季題、季語、虚子の「熱帯季題論」と台湾の歳時記～

呉昭新 (医師・俳人)

10月号では台湾での「結社」と「俳誌」に至るまでの道のりを紹介しました。今月号では、台湾での日本語俳句と季題・季語、歳時記についてご紹介致します。

## (二) 日本語文学：

## 1. 日本語俳句：

明治維新後国際交流が始まると自然そこに文化の交流があり、俳句も最も難しいといわれる詩の交流の中でいち早く世界中に行き渡ったのだ。何故だろうか？虚子の有季定型花鳥諷詠を死守する伝統派俳句の定則を以てすればそうではなかっただろう。が、世界の詩人は彼らなりに俳句の本質を解釈し世界の各言葉で彼らなりの俳句を詠んだのが『HAIKU』なのだ。そのHAIKUの本質が伝統派の言う俳句の本質そのものなのかどうかは定見がない。正直のところ伝統派の定則が俳句の本質であるかさえも問題である。この俳句の本質の問題は『HAIKU』だけでなく、本場の日本国内でも存在するのであるが、有耶無耶の中で伝統派の言い分を鵜呑みにしているだけで、事実は問題があるが、みな好き勝手に解釈しているだけである。

さて台湾ではどうかと言うと、戦前においては明治と大正の半ばまでは俳句は在日日本人の専有物で、俳句について揉め事があるとすればそれは日本本国のそれと同じで変わりはない。ゆえに旧派もあれば新派もあり碧梧桐や放哉などの自由律派もある。そして、大正後期から昭和に至っては台湾人の参加も見られるようになった。研究者たちの研究によると上述の季語、季感、熱帯季語などの季節違和の問題のほかに、日本人と台湾人俳

句には同じ季語を使っても内容的に相異があった。日本人はただ周囲の自然界の描写の花鳥諷詠が主だったが、台湾人の俳句には日々の生活の出来事や人事に関する直接に人間を詠む句が多かった。戦争が始まるといわゆる戦争俳句も数多く詠まれるようになった。このころの台湾の俳人にはかの有名な阿川燕城がいた。かれは台中商業の先生でまた多くの台湾人俳人を養成した。台湾人俳人には王碧蕉 (1915～1953)、頼天河、呉新榮 (1907～1967)、郭水潭 (1907～1995) などがいた。王の言うには「俳句が日本国民詩であると共に他民族に弘通する可能性を信じていたにせよ、俳句が広く普及するには季という大きな金しぼりがあり、これが他民族に弘通する際の障害になっている」と。

1945年終戦と同時に台湾の知識人は一夜にして文盲となった。初めの一年はまだよかった、まだ日本語が使えたからだ。が、二年目からは日本語は絶対禁止になった。今まで日本語で文芸に携わっていた人たちは筆を捨てるか外国語として中国語を習わねば生きるすべはないのだ。そして続く1946年に日本文禁止令、1947年の228大虐殺に続く白色テロと38年間続いた戒嚴令 (1949～1987)、あまたの台湾人知識人が闇の中に消えたが、一方、時代の渦のなかをうまく泳ぎ抜けて利権をつかんだ台湾人高官富豪もまた少なからずいた。これ世の常、特筆することもないが、この間台湾の日本語にも浮き沈みがあった。1950

年代には日本語は絶対のタブーだった。1960年代の後半期に少しずつ緩和され日本留学も許されるようになった。しかし日本語書籍の持込にはまだ厳重なる規制があり、当局の検閲を通らなければならなかった。例えば英和辞典さえも一ページ一ページ検閲され、人民共和国や蒙古共和国などの英語単語は墨で塗りつぶされた。そして友人が贈り物として持ち帰ってくれた当時貴重なLPのレコードセット十二枚は丁寧に鋭利なナイフで傷物にされリプレーすることができなかった。1970年代に入ってようやく私立の大学で日本語学系が設立された。国立大学で最初の日本語学系が台湾大学に設立されたのは1994年のことであった。そのころには民間では日本ブームが沸き立ち、日本の映画、書籍、歌謡、レコードに若い人たちがつめかけ、「哈日族」と呼ばれ、大学で日本語や日本文学を専攻する学生の数その他の外国語を凌駕するようになった。そして日本へ留学する学生も一途に増えた。この人たちが前述の台湾における日本短詩文学の研究結果に貢献したのである。

## 2. 季題、季語：

「椰子」と「水牛」は台湾季語を代表した「熱帯季題」でもある

水牛の角にたばしる霰哉

(明治37年4月) 高 捷

「水牛」は昭和期においては「椰子」に次ぐ俳材として台湾俳句によく詠まれたが、明治期にはまだ馴染みのない素材であった。台湾の季語を集めた最初の歳時記である小林季坪の『台湾歳時記』には水牛について次のように述べている。「水牛は黄牛に比して伶俐で、且つ奮怒する時は危険が多い。然かし又愛情は濃厚であり、牧童は犬の様水牛を愛するのである。水牛は平素見馴れぬものを見た時は、奇異の聲を放つて鳴き、或は之を襲

撃することもある。又頗る水を好んで、陽熱酷しい時には、常に泥中に転んで全體に泥を塗り、或は水に没して、頭若くは鼻のみを水上に出し、数時間に亘ることがある、之れ水牛の名ある所以である。」霰が水牛の角に激しく飛び散る——水牛の鋭い角を素材とする句は後に頻出するようになったが、水牛の角に着目したのは烏犍の句が初めてであろう。水牛は普段は大人しいが、危険を感じると鋭い角を前に突き出して相手を威嚇する習性があるので、当時内地からの移住者はこの水牛を興味深く観察する一方、一種の恐怖を覚えていた。『ホトトギス』に収録された香墨の「一週記事」にも水牛を見かけると思わず道を空けてしまうという作者の経験談が述べられている。

蘇世邦氏は俳誌『ゆうかり』所載の「椰子」の句を分析し、台湾俳句に於ける「椰子」の「本意」を考察しそして最後に結論として、台湾俳句にとって「熱帯季題論」とは何だったのかと言う問題を考察した。蘇氏はその論文の中で滔々と草間時彦の言を引用して曰く：《季語というのは、俳句の作者とそれを読む読者の間に共通の場を作るものだ》と言っているが、作者と読者とが「共通の場」を作れるのは、一つの季題に対してもともと共通した「文学的美意識」を持っているからである。その共通した「文学的美意識」とは、日本人の「文化的な記憶」である。これを伝統的な言葉で言えば季題の「本意」と言う。「本意」とは〈「文化的な記憶」を持った言葉である〉と。俳諧は、この「本意」の範囲内で、例えば「秋の暮」なら「さびしいもの」という「本意」の範囲内で詠じられていた。その為に、類型化を免れえず陳腐なものへと堕ちて行った。その弊害を除く為に、明治になって正岡子規が提唱したのが「写生」であったが、今度は、「現実の自然」と「季題の季感」との間のズレが自覚されるようになった。更に、台湾では「気候風土」の違い（「場所」の違い）による「現実」と「季題の季感」とのズレがあること

が発見される。河東碧梧桐は、小林李坪の『台湾歳時記』の序文に、自身の沖縄体験を以下のように書いている、《文中の「朝顔」、「萩」「蟬（蟋蟀）」は秋の季題である。予は全国漫遊途沖縄と言う「外地」に行って、「現実」と季題との季感のズレが明瞭に感得されたのである。碧梧桐のこの体験は、「写生」と言う視点を持ったことによって獲得したものであるが、もし、「写生」と言う視点がなかったら、「朝顔」や「萩」は作句の際、無視されていたことであろう。このような「気候風土」の違いによるズレは所謂「内地」である鹿児島や青森にもあることは、桜などの開花時期が違うことから推測できよう。しかし、「内地」ではそれ程問題にはされなかった。『ゆうかり』11巻6号（昭和6年6月号）に、藤田秀水は次のように言っている。〈季語というものは地方的一般見地が合致してそこに季題として認められるものではないかと考えるが、同じ内地に於いても北海道と九州とは花の時期に於いても多少の相違があるが然し其の気分には少しも変わりはないのである。然るに之が台湾になると余りに其の対照的矛盾が大きいのである。（中略）台湾の季題は台湾独自の立場により独立しなくてはならぬものではないかと。つまり、台湾で季題のズレが問題になるのは、台湾在住の俳人にとって、「気分」即ち、「季感」が大分異なるからであると言っているのである。元来、季題と現実の間にはズレがあるものであるが、「気候風土」の違いにより、そのズレが大きすぎる〉と。

### 3. 虚子の「熱帯季題論」:

そこで虚子により提唱されたのが「熱帯季題論」である。虚子が「熱帯季題」を夏の季としたのは、第一には「季題」と「客観写生」（「花鳥諷詠」）とを両立させるためであった。日本に住んでいる俳人にとって熱帯の事物はすべて夏の季感を有するからである。第二には、伝統擁護のためであった。

虚子は「日本本土」に興った俳句はどこ迄も本土を基準として、その歳時記は動かすべからざる尊厳なるものとして、熱帯の如きは一括して『夏』の季に概当すべきものである。そうでないと内地の季題に混乱を来して収拾すべからざるものになる」と考えていたからである。このように「熱帯季題論」は、日本の歳時記や季題を宗とする虚子の考えの中では、何ら矛盾するものではなかった。しかし台湾在住の俳人にとって、「熱帯季題」と「客観写生」とは両立するものではなかった。それは、眼前にある春や秋の季感を持った季物を詠じようとしても、「熱帯季題」により夏の句として詠まなければならないからである。例えば、台湾では「椰子の花」は春の季物と思われていた。虚子は、現実と季題とのズレを無くすために、日本の季感に外地の季題を無理やり埋め込んだが、孕江は、現実に合わせて季題を制定しようとしたのであった。両者の違いはこの点である。では、台湾では実際に「熱帯季題」を含めた季題はどのように扱われていたのだろうか。当時、台湾で使われていた季題には、日本の「季題」、「台湾季題」、「熱帯季題」の三種類があった。「熱帯季題論」とは、日本俳句にとっても、台湾俳句にとっても、近代俳句が「写生」を取り入れたことに起因する、咲いても実を結ばない「徒花」のようなものだったと言えよう。しかもその「徒花」でさえ、小さな花が咲いたに過ぎなかった。それ故、台湾俳句にとって「熱帯季題論」とは、有っても無くても良いような物であったが、日本の俳壇にとっても「熱帯季題」は大した意味を持たなかった。南方の植民地にでも行かなければ、使うことはない季題だからである。戦時中、「熱帯季題論」は戦争遂行のために利用されたが、敗戦により日本が南方の植民地を喪失すると、「熱帯季題」はすぐに不要なものになった。南方からの投句がなくなったからである。「熱帯季題」は結果として植民地季題となってしまったのである。しかし、今日では京都を中

心とした日本の歳時記を宗とする必要はない。現実に、日本国内の「外地」である北海道から沖縄、更には日系人の多いブラジルやハワイなどでも独自の歳時記が編纂されている。もはや「熱帯季題論」のような日本中心主義的な考えは必要なくなったのである。現在では、各地方が、それぞれの地域の季感に合った歳時記を持ち、それぞれの地域の季感に合った句を詠じているのである。

黄靈芝氏の『台湾俳句歳時記』は、台湾俳句「自治」への第一歩であると言えよう。また、「写生」にばかりこだわる必要もない。「季題」と「現実の風土」とのズレは、「写生」にこだわったことから生じたものである。俳句を詠じるとは、現実をカメラで写し取るようなものではなく、「季題」を通して「文化的な記憶の世界」と「現実の世界」とに出入して逍遙する事である。ここで問題となるのは、「台湾季題」の「文化的な記憶」である。明治時代に初めて「台湾季題」となったものは、当時の日本人が珍しいと感じた台湾の事物であった。「台湾季題」を詠じた台湾俳句に佳句があまりなかったのは、「文化的な記憶」を持たない季題を詠じなければならなかったからである。黄靈芝氏は、俳句は「日本的」に詠む方が詠みやすいと述べているが、それは、「日本季題」には「本意」が確立されているのに対し、俳句を「台湾的」に詠むための「台湾季題」には「本意」が確立されていないからである。つまり、台湾俳句を確立しようとするなら、「台湾季題」の「本意」の研究をしなければならぬということである。台湾人には台湾人の「文化的な記憶」があり、日本人の「文化的な記憶」とは同じ点もあれば、異なる点もあるはずである。それ故、今後は、台湾俳句に現れた「文化的な記憶」（「本意」）の研究をして行きたいと思う。つまり、『ゆうかり』雑詠欄所載の「椰子」句の分析から得られた、「台湾俳句に於ける『椰子』の季感は夏と秋にあり、『涼しさ』や『月』と取り合わせて詠じられることが多かった」という

結論は、台湾在住の日本人が有する「椰子」の「文化的な記憶」（「本意」）であったと言える。

以上を整理すると、蘇氏は『台湾歳時記』、「台湾俳材解説」、『台湾俳句集』、『ゆうかり俳句集』の季題の考察を通じて、「台湾季題」にはどのようなものがあるのかを探り、「椰子」の句の分析を通じて、「熱帯季題論」とそれを巡る議論を考察して、台湾で俳句を詠むには、台湾特有の「文化的な記憶」を探るべきだとした。

#### 4. 台湾の歳時記：

台湾に関する歳時記は二冊しかない、一冊は前掲の小林李坪の『台湾歳時記』である。これは日本統治時代に出版された唯一の歳時記で、二冊目は戦後の2003年黄靈芝による『台湾俳句歳時記』である。

蘇氏は小林李坪の『台湾歳時記』についても詳細な考察をしている。『台湾歳時記』は明治43年6月、東京の政教社から出版され、署名は「在台北小林里平」となっている。その構成は、春夏秋冬の四部立になっており、月ごとの分類はしていない。また、旧暦に拠っており、正月を春に入れている。季題の分類は人事・動物・植物の三部類となっており、天文・地理などは収録していない。四季別に見ると、夏が多く、冬が少ない。事項別に見ると、植物と人事は多いが、動物は極端に少ない。また特に、粟祭、釈典、媽祖祭、閩帝祭などの祭りに詳しい解説が為されていると言える。李坪は水辺での「洗濯」を台湾の特別な風俗として季題にしているのであるが、その後、台湾の「洗濯」は、水牛、椰子、龍骨車、龍眼肉、荔枝などとともに、台湾を代表する風物として「台湾みやげ」用の絵葉書にもなっているところを見ると、当時の日本人には余程珍しく感じられたことがわかる。一年中する「洗濯」を夏の季としたのは、足まくりをして水に足を浸けて洗濯している様が涼しげに感じられたからであろう。小林李坪の

『台湾歳時記』に対して、『台湾俳句歳時記』の著者黄靈芝氏は、『台湾歳時記』には例句が少ないという指摘をしている、数えてみると、確かに23句しかない。また台湾にも台湾の四季がありで、はっきりとしないがその四季の移り替わりというものも感ぜられる。台湾に永く住めば、少なくとも俳人には其の点はかなり敏感になってくると思う。それで台湾歳時記を作れという要求も出てくるのであるが、そうなると中、南、北部とも雨期の相違の影響から、一律に台湾歳時記として纏めることが出来なくなる。つまり、同じ台湾といっても、島の南北では季節感が異なり、小林李坪の「歳時記」には、そのあたりの事がはっきりと書かれていないので、実際に句を作るとき不便を感じると。

台湾における第二冊目の歳時記『台湾俳句歳時記』は皮肉にも日本人が台湾を去ってから58年後の2003年まで待たなければならなかった。独自の季節感のある台湾では、当然「台湾季語」があるべきだということは、戦前の日本統治期から既に多くの日本俳人の間で問題になっていたが、明治期の小林里平『台湾歳時記』(1910年)以来、本格的なものがなかった。一方燕巢俳句会の主宰羽田岳水も台湾季語の問題に興味を持っていた。『燕巢』1988年6月号には戦前台中で俳誌『竹鷄』(テッケイ)を刊行していた阿川燕城がこの問題を論じた「台湾の季感」を寄稿している。そして1989年12月号から1998年9月号まで、『燕巢』に連載された「台湾歳時記」が元になって『台湾俳句歳時記』が生まれたのである。全部で396の台湾季語(正題季語)を制定し、各8句ずつの例句と336字分の解説をつけて編集したもので、言語的にも台湾語の季語が220項目と過半数を占め、日本語が161項目、客家語が2項目、中国語

(北京語)が13項目と多岐に渡っている。しかし『燕巢』に連載されたものがそのまま著書として刊行されたのではない。内容的にも連載と刊行された著書とではかなりの差がある。連載では新年・春・夏・秋・冬という日本の俳句歳時記の伝統的な様式に従っていたが、著書ではこれを人事、自然・天文現象、自然・動物、自然・植物に大きく四分類し、季節も春夏秋冬ではなく、暖かい頃・暑い頃・涼しい頃・寒い頃と分けている。ただし人事にはこれに年末年始が加わり、自然・天文現象はこの分類に従っていない。磯田氏によると、戦前の台湾季語は南国的な異国情緒に富むのに対し、黄氏の台湾季語は土着性と文化的複合が大きい。また、一つの発見は、ここに収められている台湾季語は台湾俳句集の句(黄本人を含めて)にはあまり多く詠みこまれていないということである。

### 主な参考文献

- 1) 蘇世邦:台湾俳句の季題について-「椰子」の句を例として(南台科技大學/應用日語系/97/碩士/097STUT0079004)、2009。
- 2) 磯田一雄:黄靈芝俳句観の展開過程 -「台湾俳句」に向かうものと超えるもの-(天理台湾学会年報 第17号(日本語)、2008。
- 3) 高浜虚子:《俳句読本》、(日本教養全書-14)、p222-353;平凡社、東京、日本、1974。
- 4) 秋元不死男:《俳句入門》、角川学芸出版、東京、日本、2006。
- 5) 嶋田青峰:《俳句の作り方》、新潮社、東京、日本、1941。
- 6) 黄靈芝氏:《台湾俳句歳時記》、言叢社、東京、日本、2003。
- 7) 長谷川權:《俳句の宇宙》、花神社、東京、日本、1989。
- 8) 正岡子規:《俳人蕪村》「日本の文学 15」、中央公論社、東京、日本、1967、(青空文庫)。
- 9) 寺田寅彦:《俳諧の本質的概論》「寺田寅彦隨筆集 第三卷」、岩波文庫、岩波書店、東京、日本、1948、(青空文庫)。
- 10) 寺田寅彦:《俳句の精神》「寺田寅彦隨筆集 第五卷」、岩波文庫、岩波書店、東京、日本、1948、(青空文庫)。